福岡市の産学センター増設計画

部屋面積倍 13年度開設

2011 9/10 (土)

ナノテクノロジー（超微細技術）など最先端技術を研究する九州大学の研究者が、企業と共同で技術の開発や実用化に取り組む福岡市の「産学連携交流センター」（同市西区元岡）の増設計画の概要が9日、同市への取材で明らかになった。2012年度に着工し、13年度中の完成を目指す。

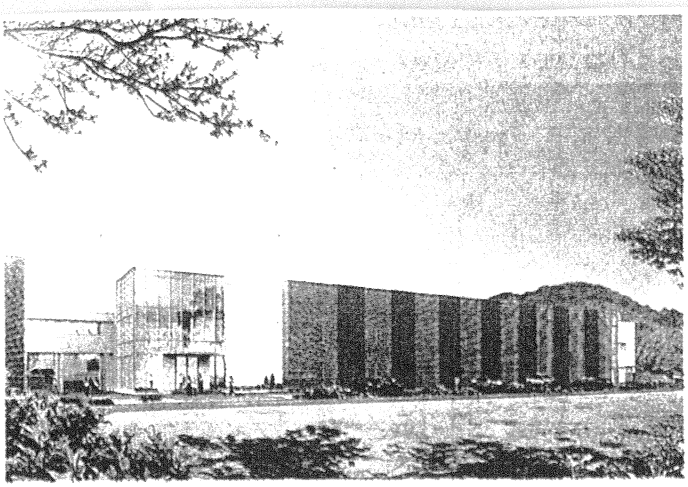
市によると、新たな施設は「第2産学連携交流センター（仮称）」で、現センターの北東側に隣接して建設。2階建てで、延べ床面積は約3400平方㍍。全15室で1部屋当たりの面積を現センターの約2倍（140平方㍍）にする。共同の研究機器（3億円程度）も購入する計画で、事業費は11億円を超える見込み。

九大伊都キャンパスから距離約700㍍という好立地の現センターは、08年に開設。2階建てで、研究室や貸しオフィスなど計29室がある。

研究者では次世代の携帯電話やテレビ画面に使われる素材「有機EL」開発で第一人者の九大工学研究院の安達千波矢教授や、ナノテクノロジーを活用し、注射でしか摂取できない成分を塗り薬で代用する技術を研究する同研究院の後藤雅宏教授など6人が入室。貸しオフィスに企業が入っている。

開設時から満室状態だが、世界トップレベルの研究者と技術提携を求める全国の企業などから、入所の申し出が相次いでいるほか、研究者からも作業スペースの拡張を求める声が上がっており、市は「新産業創出につなげるためにも増設が必要」としていた。

（飯田崇雄）



増設する「第2産学連携交流センター」（仮称）のイメージ図